

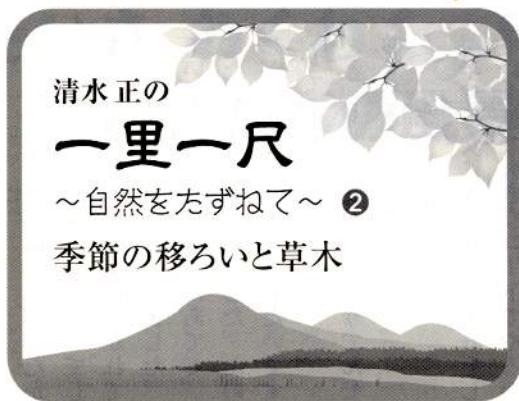
冬の日の観察

清水正の

一里一尺

～自然をたずねて～ ②

季節の移ろいと草木



しの姿です。

すっかり葉も落ちてしまった森は、葉がなくなつたぶん鳥たちを発見したり見やすかったり、木の実をつつく様子が見られます。また普段は葉っぱに覆われていて木の枝の形など分からないのですが、この時期の落葉樹は葉が散ってしまったので、しっかり枝の形が見えます。青空を背景に見る木の姿は美しいです。そして木の種類によつて枝ぶりはいろいろです。細かい枝がたくさん出ている木、大雑把にしか枝を出さない木、くの字くの字を書くようにカクカクした枝の木、個性豊かに自由奔放に曲がりくねつた枝の木、まるでUHFアンテナのように長い枝の横に短い棒がくついたりするような枝を持つ木。こんなにも木の姿つていろいろあるんだなと、新たな発見に寒さも吹っ飛びます。

北堀公園の水辺にスーッと背の高

い樹がいくつか並んでいます。樹肌は少しがさがさして縦に裂けています。カツラの木です。私が冬の観察会でカツラの木を見つけたら、いつも観察対象として取り扱います。幾本かのカツラを見上げてもらうと、二種類の枝が見つかります。ひとつは、真つ直ぐ伸びた枝に向かい合わせで冬芽が一定間隔で付いています。もう一つは同じような冬芽の脇にミニチュアのパナナが付いている枝を持っています。更によく観察するとミニチュアのパナナが付いている枝を持つ樹とまったく付いていない樹があることに気づきます。実はこのミニチュアパナナは実だつたのです。だからカツラは実の付く樹（雌）とつかない樹（雄）があるのです。カツラの木の雌雄を見極めるのには、冬が最も分かりやすいのです。普段気づくことが出来ないものを気づかせてくれる冬の森です。

キヤラメルの香りが漂う秋

カツラの木は春の芽吹き頃の美しい緑、秋の日の鮮やかな黄葉。そして落葉から醸し出す綿菓子ともキヤラメルとも形容される甘い香りなど、人を魅了させ人氣が高い樹の一つです。また、葉の形が丸くハート型に切れ込んでいるのが可愛いということも女性に良く言われます。ここまでは多くの人がよく知るところだと思いますが、「どんな花が咲くの？」と問われると「えっ!?」といっ



カツラの雌花
《雌しべの花柱が四つに別れている》



カツラの雄花
《花びらはなく雄しべだけ》

た後、言葉が出ないのではないのでしょうか。はつきり言ってカツラの花を見るといった人はかなりマニヤックでしょう。自然観察会で来る方にも、「木ってどれも花が咲くのですか」という方もおられます。でも無理もないですね、大きな樹は上の方で花は咲くし、小さな花しかつけないものが多いですから。特にカツラの雌花は柱頭だけが、雄花は雄しべだけが赤く付いていて花弁などはないのですから、なんか枝先が赤くなっている程度の認識しか出来ません。

それで
もこの木
は各地の
公園など
に良く植
えられて、
秋を彩つ
てくれま

す。私達が観察会でよく使う京都御苑、宝ヶ池、皇子が丘公園、堅田の春日山公園などにも見やすいところに植栽されています。お寺や神社などでは高木になるので御神木になって大きく育っています。自生では水を好む性格なので冷涼な山の沢沿いなどに大きなカツラがよく見られます。貴船神社奥宮の先にもたいそう立派なカツラが生育しています。でもスギやケヤキ、トチといった大木とはどこか趣が違います。カツラは大木・古木になると中心の大きな幹(主幹)の周りに、子どもが寄り添うよ



貴船奥宮の奥にあるカツラの大木
(京都市天然記念物 幹周/5.18m、樹高/37m)

うに少し細めの木が株立ちをしたかのように育っています。俗に言うひこばえ（萌芽）です。不思議だなあと思っていました。調べていくと「カツラは種子からの発芽、成長の率が低い」と記述されている論文を発見しました。発芽成長率が悪いので長く生き、親木が少しでも長く生き、

若さを保つために萌芽による更新を行なっていると考えられます。その生き様のあらわれが樹形となっていたのだと思います。念のためカツラの実から種子を取り出すと、実に小さい種子です。しかもこの種子が風に飛ばされ行方定めぬ旅に出て、未知の地に着地します。この地が生育に適するかどうかかわからないことを考えると、親も心配でたまらないのでしょうか。

カツラの黄葉はカエデ類より早く訪れます。真っ黄色ではらはらと散る落葉は沢沿いの道を黄色く彩りま

す。目をつぶって五感をはたらかせると、足元のカサコソいう音と鼻に懐かしい綿菓子のような甘い香りがくすぐります。「知る人ぞ知る」で、これがカツラを好きだと言わせる一つの要因となっています。

賀茂の祭りと植物

みなさんがこの「ひろば」を手にする頃、爽やかな初夏になり京の町は葵祭で観光客が沢山訪れます。

葵祭は京都の三大祭りのひとつであるとともに、古来より続き平安時代で「まつり」といえば賀茂祭り（葵祭）をさしたと言われます。この祭りに欠かすことの出来ないものがカツラです。祭礼に列する斎王代をはじめ参加者の衣装、牛車などにカツラの枝とフタバアオイを絡ませた「葵桂（きつげい）」が飾られます。この由来は「賀茂日記」や神話によると言われています。そういった意

味では京都の人にとってカツラは親近感を感じる植物の一つでもあるのでしよう。

葵祭の名前にも被せられた「葵」とはどんな植物なのでしょう。これはウマノスズクサ科の多年草フタバアオイのことです。日本人なら誰もが知っている水戸黄門で、最後に「この紋所が目に入らぬか」と角さん・助さんが差し出す印籠に描かれている文様です。ただし、印籠の家紋では「三つ葉葵」になっています。自然界にあるものは名前の通り二葉ですから、このフタバアオイを變形し



賀茂社の御神紋、フタバアオイの紋

て紋にしたものです。かつては京都市北部にもフタバアオイは沢山あったといわれています。現在は希少植物とまではなっていないませんが、激減しているために葵祭で使うフタバアオイは栽培増殖したものが使われています。フタバアオイの仲間にはウスバサイシンや数種のカンアオイなどがありますが、カンアオイ類と言われるものの多くは地に這うように葉を出し、その下に地面に潜ったり花の先だけを地際に出すような形で筒状の花をつけます。ですから普通



カンアオイの仲間の葉裏に産み付けられたギフチョウの卵
《眞田幹雄氏撮影》



カタクリに吸蜜に来たギフチョウ
《眞田幹雄氏撮影》

に見ていては葉だけしか分かりませ
ん。この葉に卵を産み付け幼虫の餌
としているのがギフチョウです。ギ
フチョウがカタクリの花に止まる写
真はよく見ますが、あれは蜜を吸い
に来ているだけで、ギフチョウを絶
やさないためにはこの地味な花が
とつても重要です。またカンアオイ
は江戸時代に愛好家が葉の斑入り模
様を競って品評会をしていました。
人によってさまざまな植物が生活や
文化に生かされている一つです。
さて話をフタバアオイに戻しま

しょう。

フタバ

アオイ

はカン

アオイ

類と違

い、地

上一〇

センチ

ほどに

なり、二枚出た葉の分岐の所に花を
つけます。赤味を帯びた茶色で萼の
先が三角状に切れてめくれあがって
いるのが可愛いです。

立夏《筍生ず》竹は竹!?

葵祭りの頃、立夏になり七十二候
では「筍生ず」(ここで言う筍は在来
種の破竹や真竹をさしています)と
よばれる時候となります。最近の温
暖化傾向で実際はもう少し早くに筍
が市場に出て来るようになりました。



フタバアオイ(茎の途中に見えるのが花)

私達日本人にとって、とりわけ京都の人々にとって旬のものの代表格と云ってもいいでしょう。何しろ竹かんむりに旬と書いて筍というくらいですから。若竹煮、採ってすぐの筍の刺身、更に季節を添えて木の芽和えなど美味な山菜です。灰汁を抜いたりするのが少し面倒ですが、それが野のものを味わう楽しみなのかもしれない。とは言うものの、私が以前に勤務していた栗東自然観察の森というところでは園内に竹林があり、この季節になるとまさに「雨後の竹の子」と言われるように毎日筍が出てきます。また、成長が早い。放置しておくとも竹藪になってしまったり、他の植物エリアを侵してしまっています。筍掘りが重要な仕事となります。掘った筍は捨てるわけにもいかず持ち帰るのですが、毎日ともなると美味な山菜とは言っておられませんが。友人・知人に声をかけて貰っ

て貰う羽目になります。中には灰汁抜きして渡すこともあり大変でした。モウソウチクの筍も終わる頃、今度は在来のはチクやマダケが出たします。こちらの方はわりと簡単に手でも折れ、少し大きくなっても柔らかな、灰汁抜きもさほど手間なく出来て美味しいです。エヂソンが電球のフィラメントを八幡のマダケから作ったことはつとに有名です。

「竹は木ですか、草ですか」「いいえ、竹です」「竹は竹?」。一年で大きくなり、その後肥大も伸張もしません。一年で枯れることもありません。肥大しないので年輪もなく、中は空洞です。その成長速度の速さは驚くほどです。一日でマダケ一二一cm、モウソウチク一一九cmの記録があります。その訳は木や草は成長点が先端にあり、そこからしか伸びないので、竹には各節毎に成長点があるため節毎の成長の合計が竹一

本の成長

となるからです。

ちなみに

竹の節は

約六〇と

いわれて

います。

成長が

早いばかりではなく、横に地下茎を伸ばし、どんどん広がっていき、いつの間にか山麓一帯、丘陵といわれる山ならそれを覆い尽くしてしまうほどに分布を広げているモウソウチクです。現代の人間が竹林に手を入れなくなると放置竹林が増えた結果です。今、里山の危機（生物多様性の喪失）の一つに数えられています。多くの生態系や生物多様性を失うことに人間の関わる人が多いです。賢く自然と付き合う術をしつかり考えてみませんか。



放置竹林の整備作業